

調査報告

第9次ルクソール西岸 アル＝コーカ地区調査概報

近藤 二郎*¹・吉村 作治*²・菊地 敬夫*³・柏木 裕之*³
河合 望*⁴・高橋 寿光*⁵・福田 莉紗*⁶

Preliminary Report on the Ninth Season of the Work
at al-Khokha Area in the Theban Necropolis
by the Waseda University Egyptian Expedition

Jiro Kondo*¹, Sakuji Yoshimura*², Takao Kikuchi*³, Hiroyuki Kashiwagi*³,
Nozomu Kawai*⁴, Kazumitsu Takahashi*⁵, and Risa Fukuda*⁶

Abstract

The team from the Institute of Egyptology at Waseda University has carried out clearance, conservation, and documentation at the tomb of Userhat, Overseer of King's Private Apartment under Amenhotep III (TT 47), and other tombs in the vicinity at Al-Khokha area in the Theban Necropolis since 2007. Although the tomb of Userhat is one of the most important private tombs from Amenhotep III's reign, no comprehensive scientific research has been undertaken because its exact location had become unknown even after Howard Carter wrote its short report in 1903.

In the previous seasons, we uncovered the entrance of the tomb, which has the lintel and doorjambs on both sides. They were decorated with incised hieroglyphic inscriptions and the figures of the tomb owner, Userhat. We have also located the subterranean structure of the tomb through the clearance of the debris in a hole where the ceiling of the chamber has collapsed in the past. At the south side of the western rear wall of the transverse hall, we found a relief decoration which depicts Amenhotep III and Queen Tiye seated under a canopy. At the inner chamber, we found a dyad, probably of Userhat and his wife, carved in the south wall of the chamber.

In 2013, we found an unfinished tomb (KHT01) to the south of the forecourt of the tomb of Userhat (TT47) in the course of our clearance. The entrance of KHT01 is hewn on the southern wall of the forecourt of TT47. It was found out that the tomb KHT01 leads to another tomb, the tomb of Khonsuemheb (KHT02) who has the title of the Chief of the Workshop and Chief Brewer of the Mut temple.

In this season, we continued the clearance of the forecourt of the tomb of Userhat (TT47) in order to understand whole structure of the tomb and subsequent history of the site after its construction. Also, we carried out scientific analysis concerning the wall paintings of the tomb of Khonsuemheb in order to make future program for

* 1 早稲田大学文学学術院教授 / 早稲田大学エジプト学研究所所長

* 2 東日本国際大学学長 / 早稲田大学名誉教授

* 3 東日本国際大学エジプト考古学研究所客員教授

* 4 金沢大学新学術創成研究機構准教授

* 5 東日本国際大学エジプト考古学研究所客員講師

* 6 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程

* 1 *Professor, Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University /
Director, Institute of Egyptology, Waseda University*

* 2 *President, Higashinippon International University / Professor
Emeritus, Waseda University*

* 3 *Visiting Professor, Institute of Egyptian Archaeology, Higashinippon
International University*

* 4 *Associate Professor, Institute for Frontier Science Initiative,
Kanazawa University*

* 5 *Visiting Lecturer, Institute of Egyptian Archaeology, Higashinippon
International University*

* 6 *Doctoral student, Department of Archaeology, Waseda University*

clearance, documentation, and conservation. Anthropological study was carried out as well.

The clearances revealed full structure of the mud-brick wall containing Userhat's funerary cones *in situ* and the mud-brick ramp which were partially found at the forecourt in the last season. During the clearance, we have found another funerary cone in rectangular shape with two stamps of Userhat *in situ* in the mud-brick wall, under the row of five funerary cones. Also, we found edge of a small square pit cut into from the bedrock floor of the forecourt. Howard Carter already mentioned this small pit as "Mummy pit" in his report in *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte*, 1903. The clearance of the pit will be resumed in the next season.

1. はじめに

早稲田大学古代エジプト調査隊は、1972年1月にエジプト・アラブ共和国、ルクソール西岸のマルカタ南遺跡で発掘調査を開始し、1974年1月にコム・アル＝サマク（魚の丘）において、新王国時代第18王朝アメンヘテプ3世時代の彩色階段を発見した¹⁾。この発見を受けて、アメンヘテプ3世時代をその後の主な研究対象とし、アメンヘテプ3世の王宮であるマルカタ王宮、アメンヘテプ3世時代のルクソール西岸の岩窟墓や王家の谷・アメンヘテプ3世王墓の調査など、当該時代の研究を進めてきた²⁾。

こうしたアメンヘテプ3世時代の研究の一環として、早稲田大学エジプト学研究所は、2007年度から新

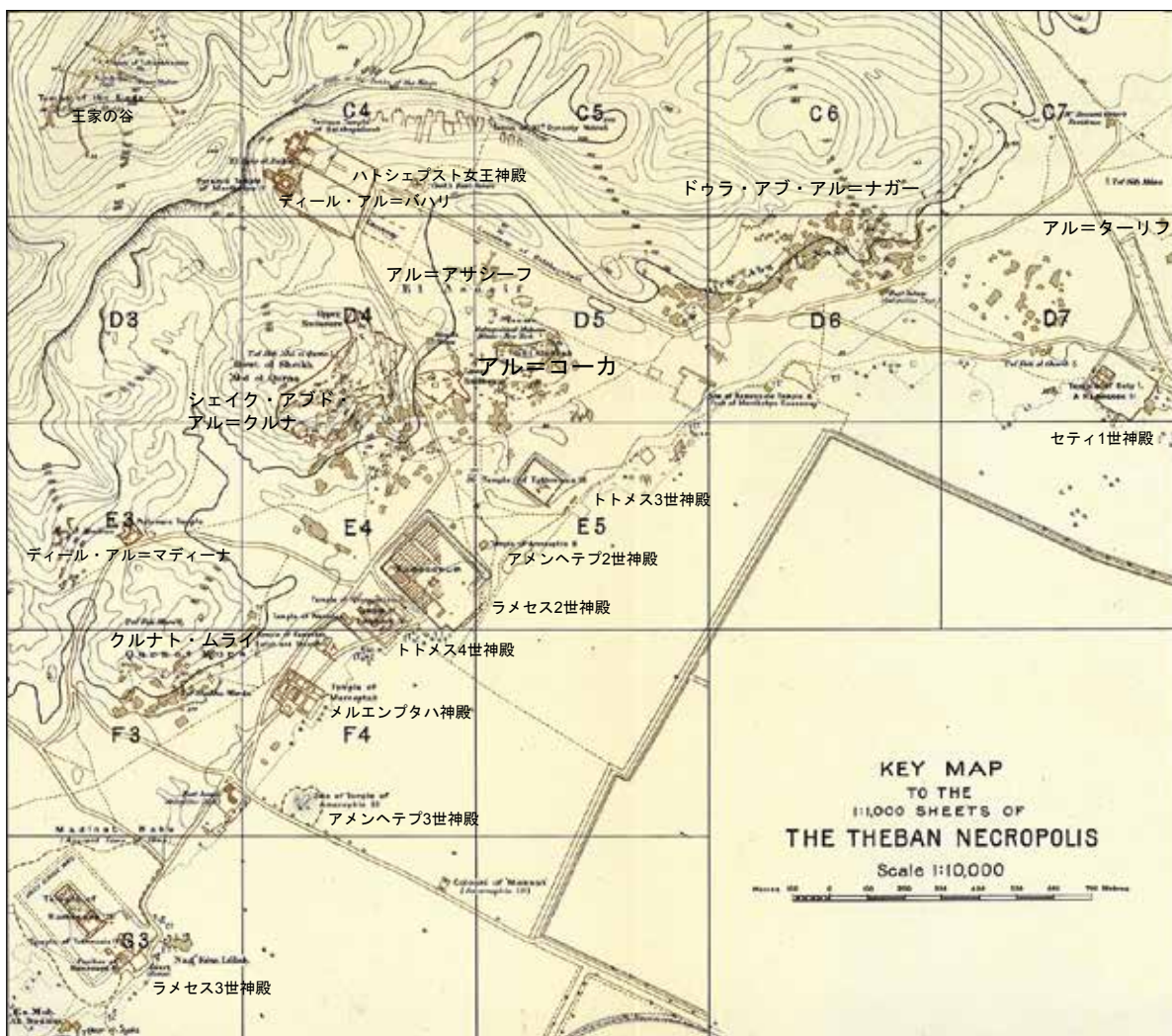


図1 ルクソール西岸地図 (Engelbach 1924: pl.II を一部改変、スケール 1:20,000)

Fig.1 Map of Theban Necropolis

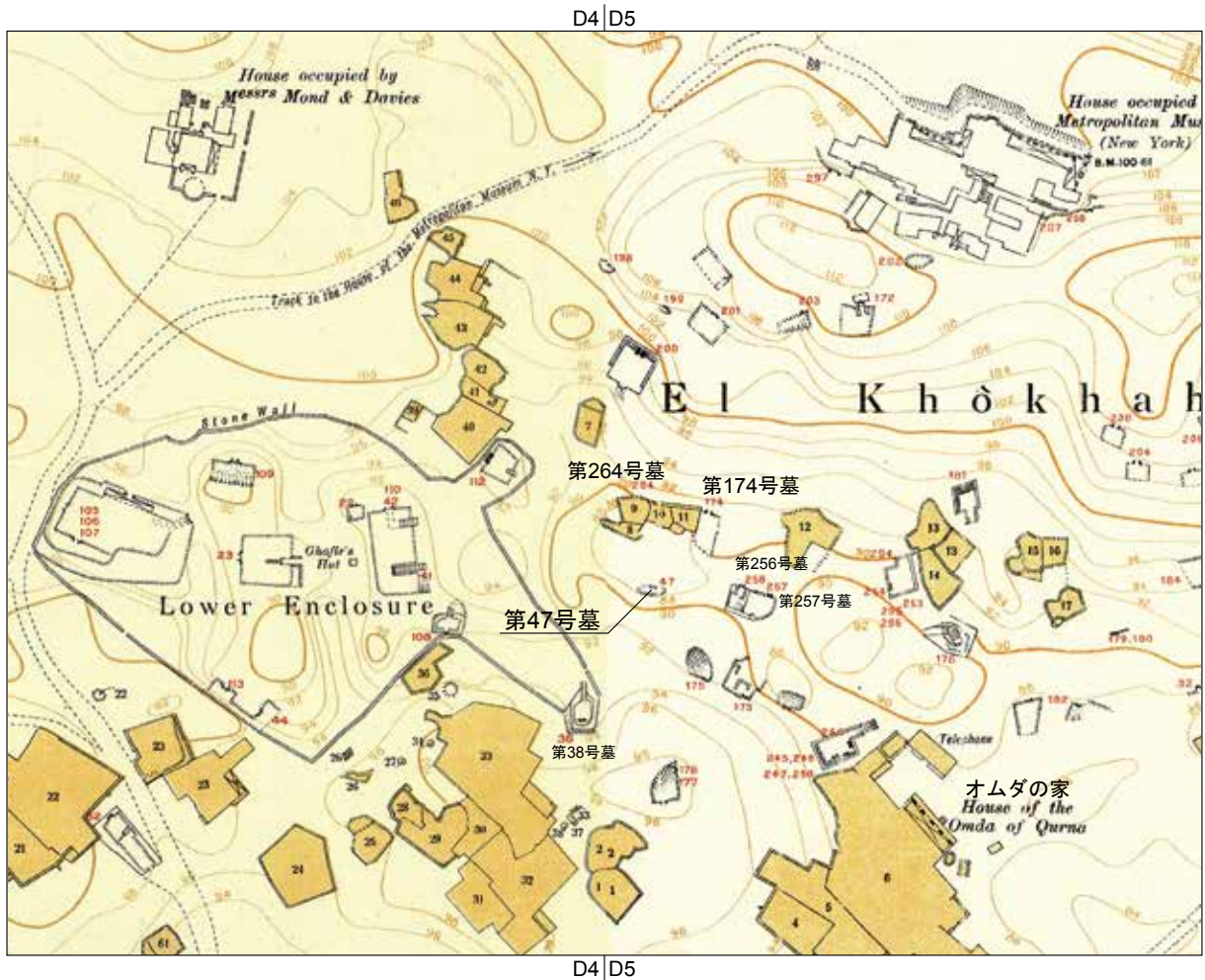


図2 アル=コーカ地区地図 (“Map of the Theban Necropolis” of Survey of Egypt from 1922 to 1924 を一部改変、スケール 1:2,000)
Fig.2 Map of al-Khokha area

たにルクソール西岸、アル=コーカ地区に位置するアメンヘテプ3世時代の岩窟墓、第47号墓を対象に調査を開始した(図1, 2)。調査の対象とした第47号墓は、アメンヘテプ3世の後宮(ハーレム)の長官などを務めたウセルハトという人物の墓で、アメンヘテプ3世時代の高官墓に特徴的な、良質なレリーフ装飾と列柱を備えた大型岩窟墓の1つとして極めて重要である。本調査では、墓の構造、装飾、被葬者の称号、家族関係などを明らかにするとともに、これらの資料をもとに研究を実施し、同時代の大型岩窟墓の特質と発展を解明することを調査の目的とした³⁾。第47号墓はH.A. ラインド(Rhind)やH. カーター(Carter)などの報告により、19世紀からその存在が広く知られていたものの⁴⁾、総合的な調査は行われておらず、2007年度の調査前の時点で墓は厚い堆積に覆われ、正確な位置すら不明となっていた。こうした状況を受けて早稲田大学エジプト学研究所は、2007年12月にアル=コーカ地区において第47号墓の再発見・再調査を目的とした発掘調査を開始し、その後、調査を継続している。

これまでの調査により、第47号墓を再発見するとともに、これまでカーターなどによって報告されていなかった第47号墓の詳細を明らかにすることができた(近藤他 2011, 2012, 2013, 2014)。入口脇柱には、南北それぞれ垂直方向に5行の碑文が刻まれており、下部には被葬者であるウセルハトが座った姿で描かれていた。また、脇柱の碑文から、これまで知られていたウセルハトの称号 *imy-r ipt nswt* 「王の後宮の長官」に加え、*imy-r htmtyw nw pr-nswt* 「(王宮の) 印綬官の監督官」という別の称号が明らかになった。更に、第

192号墓（ケルエフ墓）のように、ウセルハトの名前や図像の顔などが意図的に削られた痕跡も確認された（近藤他 2011）。また、第47号墓前室西壁の南側では、墓主のウセルハト、アメンヘテプ3世と王妃ティイが描かれた浅浮き彫りのレリーフ装飾と碑文を発見した。現在、第47号墓由来の王妃ティイのレリーフがブリュッセル王立美術歴史博物館に収蔵されているが（E.2157）、本来装飾されていた場所が明らかとなった。更に、奥室の南壁、北壁には壁龕の内部にウセルハトと妻の彫像が発見された（Kondo and Kawai 2017; 近藤他 2013）。

また、第7次調査では、第47号墓の前庭部南壁から、新たに2基の岩窟墓、KHT01とKHT02（コンスウエムヘブ墓）を発見した（Kondo and Kawai 2017; 近藤他 2015）。更に、第8次調査では、第47号墓の前庭部の発掘調査を継続し、日乾レンガの壁体や日乾レンガのスロープなどの遺構を発見した。ただし、第8次調査では、前庭部の発掘は完了していなかった（近藤他 2016）。

これまでの調査成果を受け、第9次調査では、主に第47号墓の前庭部の発掘調査の完了を目的とした。また、第7次調査で新たに発見されたKHT02（コンスウエムヘブ墓）の今後の保存修復作業の計画立案を目的とした保存修復、化学分析の専門家による事前調査も実施した。その他、これまでに発見されたミイラ、人骨の人類学的調査も実施した⁵⁾。本稿では、こうした経緯と調査目的のもと、2015年度にルクソール西岸アル＝コーカ地区の第47号墓およびその周辺において実施した第9次調査について報告を行う⁶⁾。

2. 第47号墓の調査

今期の調査では、第47号墓前庭部の完掘を目標として発掘調査を実施した（図3, 写真1）。第8次調査では、前庭部北壁から約1m南側の場所で、日乾レンガの壁体が発見された。この日乾レンガの壁体はカーターが1903年の*Annales du Service des Antiquités de l'Égypte*の中で報告しているものである（Carter 1903: 177）。長さ約7m、幅約1.5mである。壁体からは、5つのウセルハトの葬送コーンが原位置で発見された（近藤他 2016: 116, 図4）。

今期調査で、発掘を継続したところ、5つの葬送コーンの約46cm下方から新たに1つのウセルハトの葬送コーンが発見された（図4, 5, 写真2）。前回の調査で発見された上列の葬送コーンは、円錐型で小口面にスタンプが押されていたが、新たに発見された葬送コーンは、直方体であり、長手面に2つのスタンプが押されていた。また、壁体は前庭部の岩盤の床面直上に設置されていることも明らかになった。壁体の背後には、まだ堆積土があるため、壁体の機能や建造年代については、今後の発掘調査の進展を待って結論付けたい。

更に、第47号墓前庭部北西隅の日乾レンガ壁体の南側からは、岩盤に穿たれたピットの上面を発見した（図3, 写真1, 3）。このピットは、カーターが1903年の*Annales du Service des Antiquités de l'Égypte*の中で報告している「ミイラピット」と考えられる（Carter 1903: 177）。このピットは次回以降の調査で発掘を実施する予定である。

前回調査において、前庭部の中央で発見された日乾レンガのスロープについても、今期調査で発掘が完了した（図3, 写真4）。このスロープは第47号墓の入口の中心軸上に位置しており、東に向かって上昇している。スロープの全長は約420cm、幅は約210cmを測る。

更に、今期調査で第47号墓前庭部を完掘したことにより、第47号墓入口の全容も明らかにすることができた（図6, 写真1）。

今期調査では、前庭部の周囲でも発掘を行い、東側斜面でも日乾レンガの壁体を発見した。これらは前庭部東壁の岩盤の上部に位置しており、おそらく砂礫が前庭部に崩落するのを防ぐために構築されたものと考えられる（図3, 写真5）。

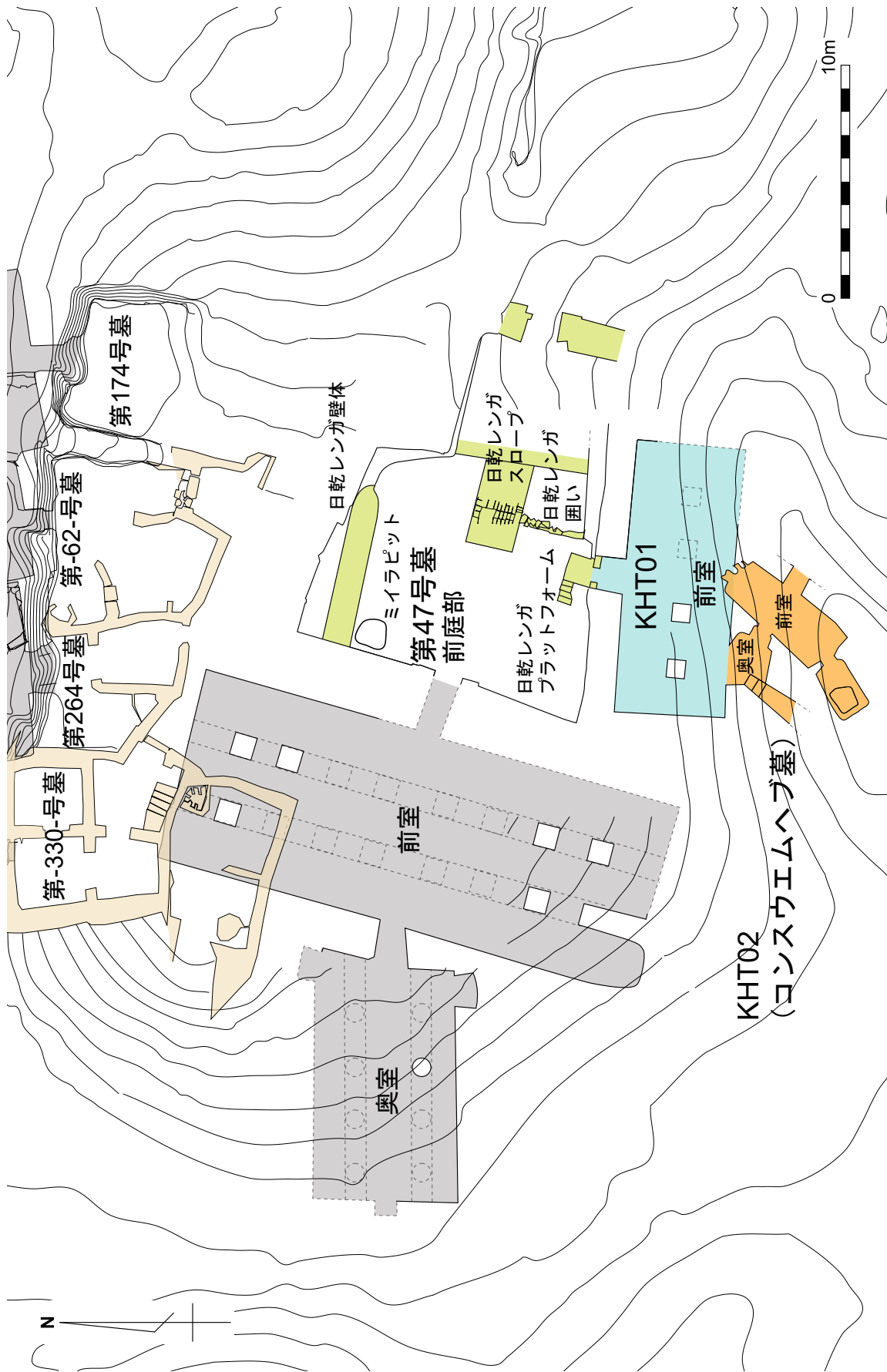


図3 第47号墓およびその周辺地図 (第9次調査終了時)
Fig.3 Map of tomb of Userhat and its vicinity

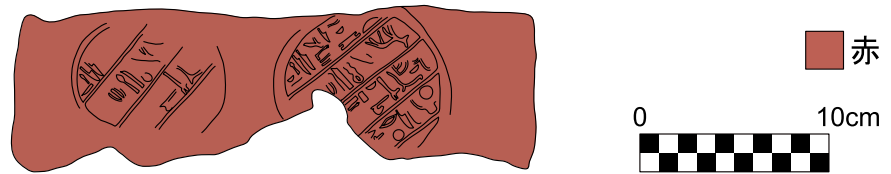


図4 日乾レンガの壁体から新たに発見されたウセルハトの葬送コーン
Fig.4 Another funerary cone of Userhat *in situ* in the mud-brick wall



写真1 第47号墓前庭部（第9次調査終了時、東より）
Pl.1 The forecourt of the tomb of Userhat, looking from east

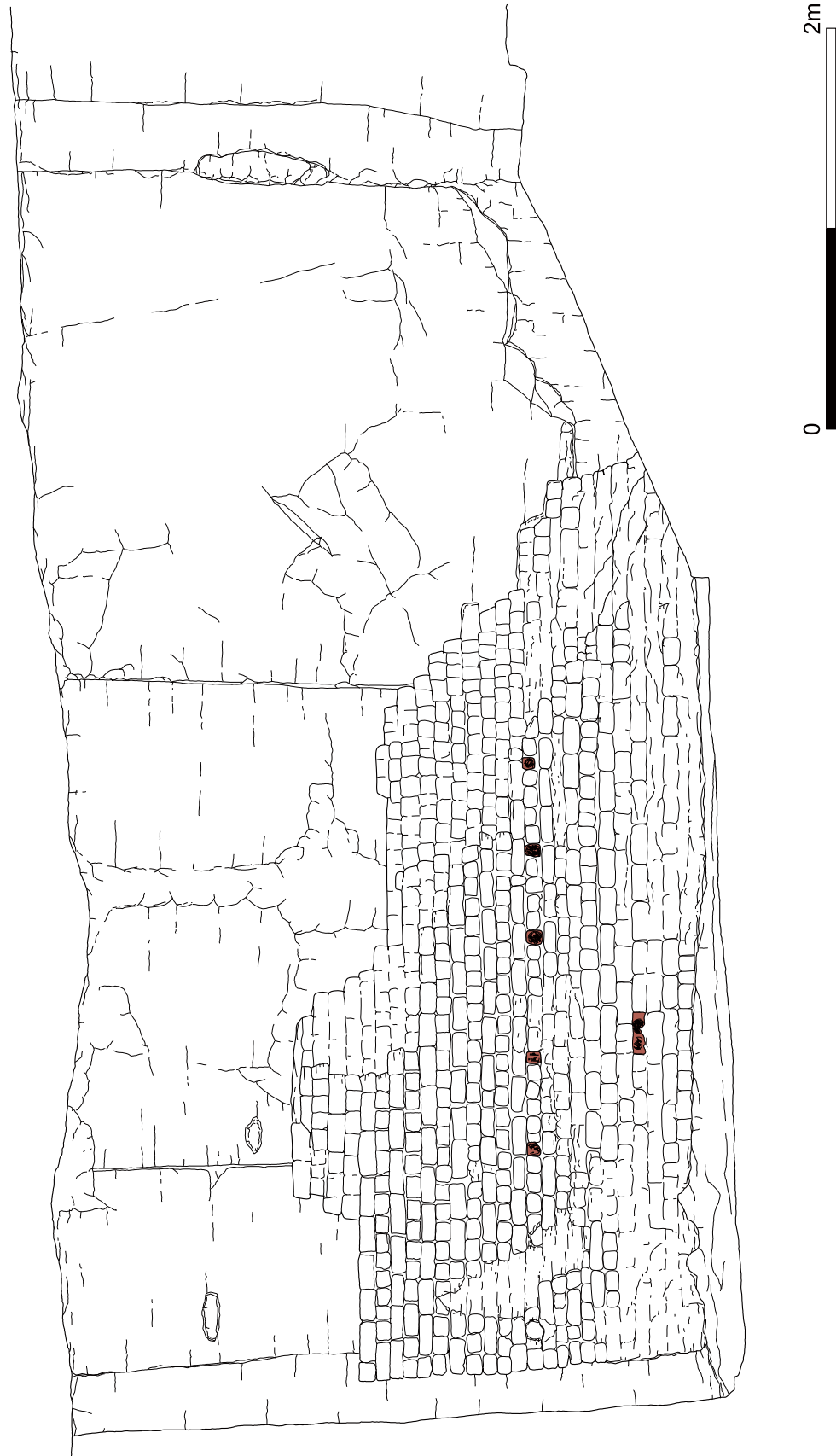


図5 ウセルハトの葬送コーンがはめ込まれた日乾レンガの壁の壁体（南より）
Fig.5 The mud-brick wall with the six funerary cones of Userhat found *in situ*, looking from south

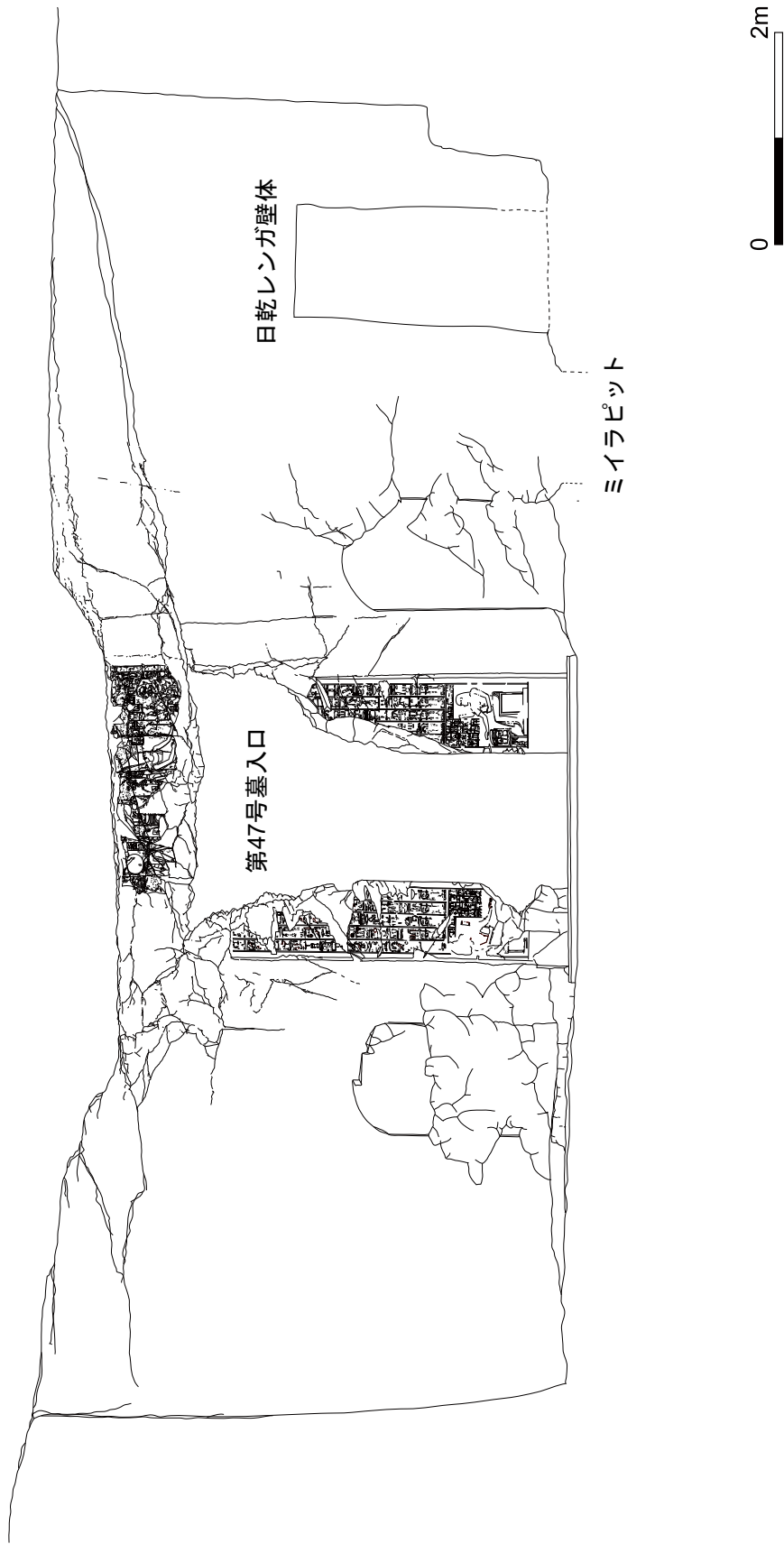


図6 第47号墓入口
Fig.6 The entrance of tomb of Userhat



写真2 ウセルハトの葬送コーンがはめ込まれた日乾レンガの壁体（南より）
Pl.2 The mud-brick wall with the six funerary cones of Userhat found *in situ*, looking from south



写真3 第47号墓前庭部のミイラピット
Pl.3 The So-called "Mummy pit" at the forecourt of the tomb of Userhat, looking from southeast



写真4 第47号墓前庭部、日乾レンガのスロープ
Pl.4 The mud-brick ramp in the forecourt of the tomb of Userhat



写真5 第47号墓東側斜面（第9次調査終了時、北西より）
Pl.5 The eastern side of the forecourt of the tomb of Userhat, looking from northwest

3. 主要出土遺物

以下では、今回の調査において、第47号墓およびその周辺で取り上げた遺物のうち、主要なものについて報告する。

(1) 石灰岩製レリーフ片

寸法：高さ 11.8cm、幅 15.8cm (図 7.1)

高さ 18.9cm、幅 15.0cm (図 7.2)

時代：新王国時代アメンヘテプ3世

第47号墓入口前の発掘中に出土したものである。図 7.1 には供物とカーの手が描かれている。図 7.2 には銘文の一部が施されている。これらの破片は第47号墓の入口脇柱に由来するものと考えられる。

(2) デモティック・オストラコン

寸法：高さ 21.8cm、幅 12.0cm (図 7.3)

時代：前7世紀～前1世紀(?)

石灰岩片の両側面にデモティックが書かれたオストラコンである。第47号墓前庭部から出土した。オストラコンには個人名の一覧が記されている。

(3) シャブティ

寸法：高さ 9.9cm、幅 3.9cm (図 7.4)

時代：第3中間期～末期王朝時代

今期の調査で出土したシャブティの多くは小型で未焼成の土製である。図 7.4 のようなファイアンス製のシャブティも少数ではあるが出土しており、これらは全て第3中間期から末期王朝時代に年代づけられる。

(4) 葬送コーン

①ウセルハト (*Wsr-h3t*) の葬送コーン

寸法：高さ 26.8cm、幅 9.8cm、厚さ 9.3cm (図 8.1)

高さ 12.8cm、幅 9.7cm、厚さ 8.7cm (図 8.2)

時代：新王国時代アメンヘテプ3世

前述したように第47号墓前庭部の日乾レンガの壁体から、ウセルハトの葬送コーンが壁体にはめ込まれた状態で新たに1つ発見された(図 4, 5, 写真 2)。その他、前庭部からは、11点のウセルハトの葬送コーンが出土した(Davies and Macadam 1957: #406)。図 8.1 の葬送コーンは、中空になっており、内部は回転具のようなものを使用した痕跡がある。

②メリレメチュエフ (*Mry-rmt=f*) の葬送コーン

時代：新王国時代

メリレメチュエフの葬送コーンが1点出土した(Davies and Macadam 1957: #452)。メリレメチュエフは「王の執事 (*wb3 nswt*)」と「育児所の子 (*hrd n k3p*)」の2つの称号を有している。墓の位置は不明である。メリレメチュエフの葬送コーンは、第3次調査でも出土している(近藤他 2011: 55)。

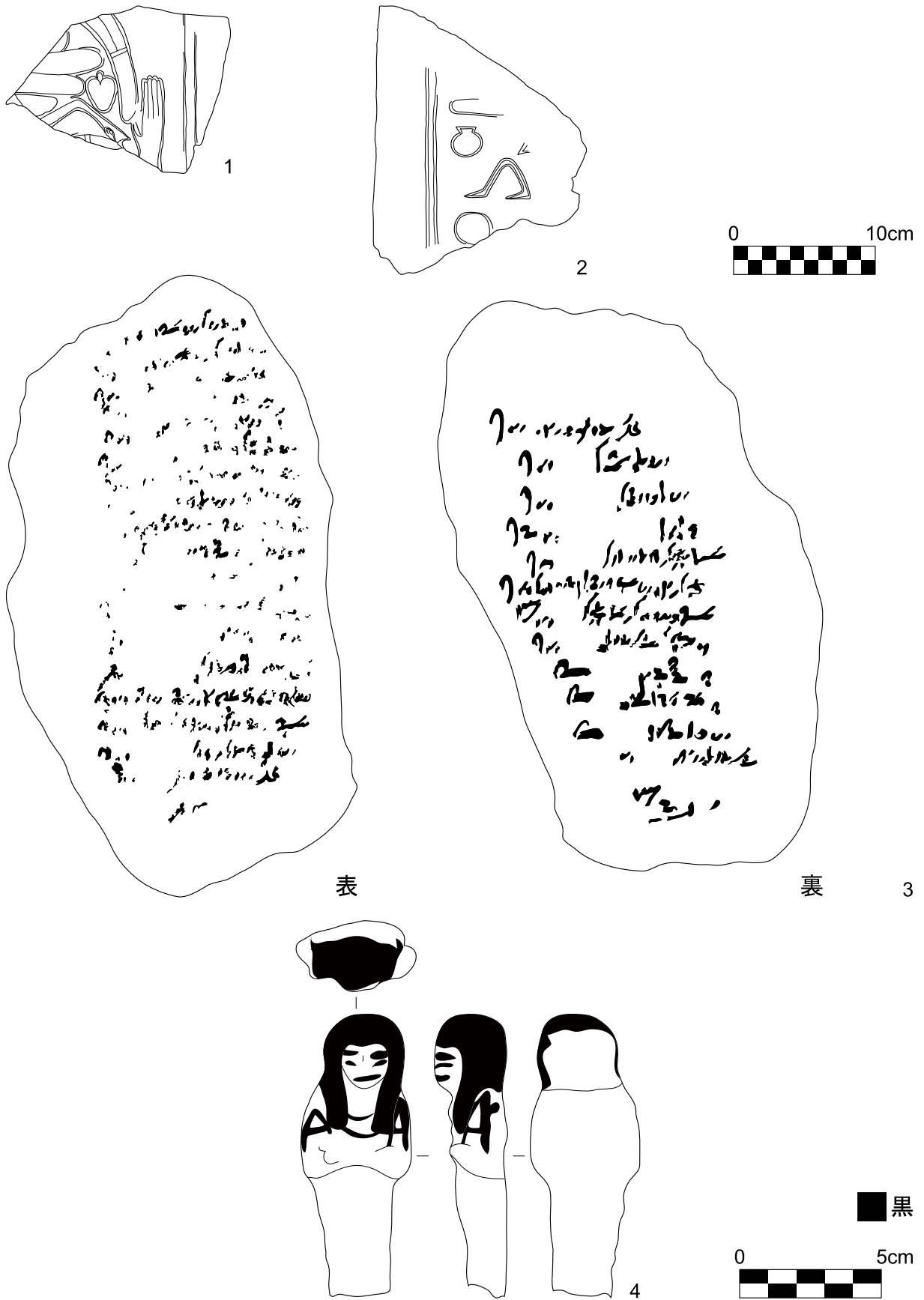


図7 主要出土遺物 (1)
Fig.7 Major finds (1)

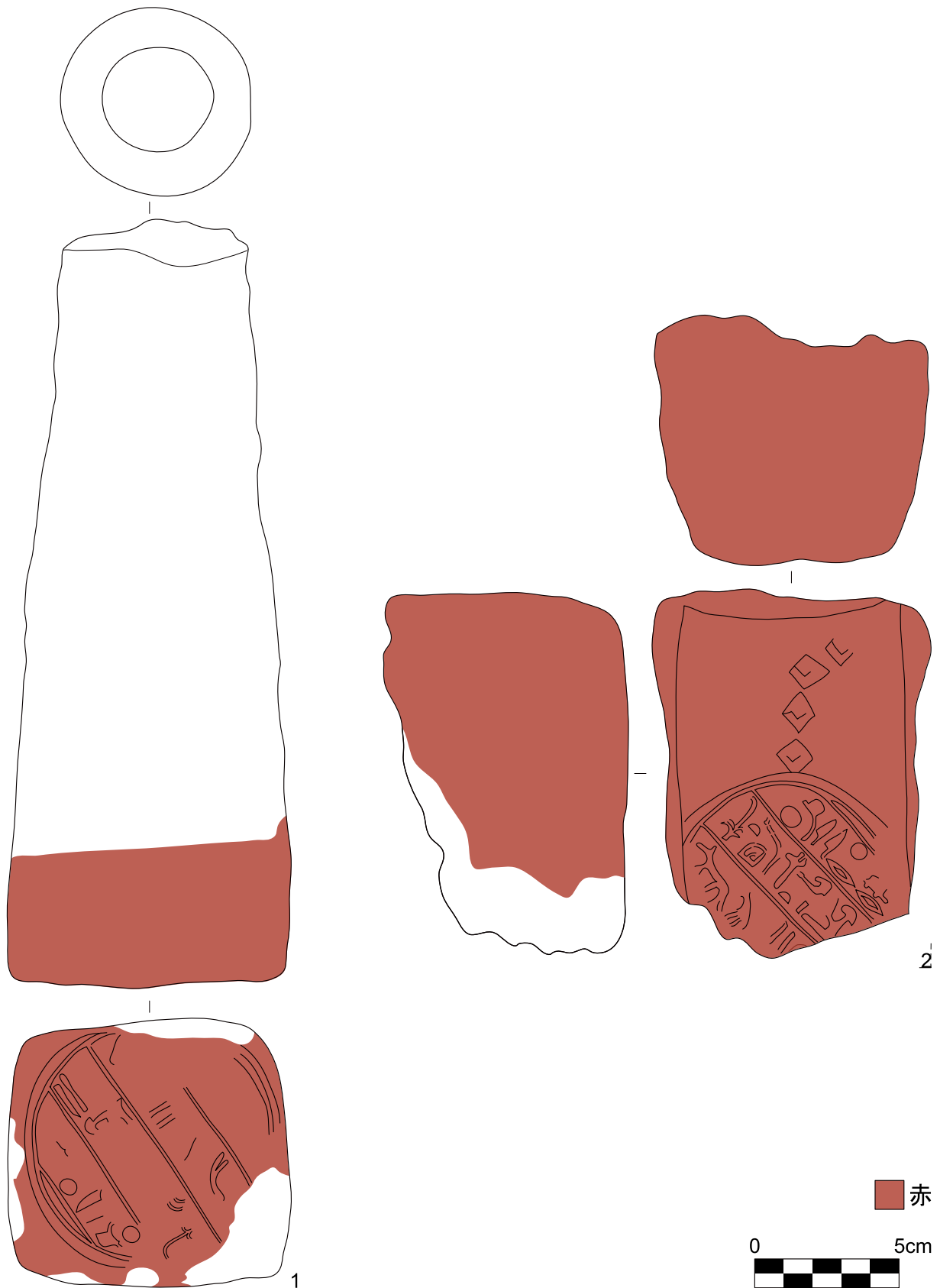


図8 主要出土遺物 (2)
Fig.8 Major finds (2)

③メンチュエムハト (*Mntw-m-h3t*) の葬送コーン

寸法：高さ 19.5cm、幅 8.9cm (図 9.1)

時代：末期王朝時代第 25 王朝

メンチュエムハトのコーンが 1 点出土した (Davies and Macadam 1957: #486)。メンチュエムハトは「アメン第 4 司祭 (*hm-ntr 4 nw Imn*)」で第 25 王朝のテーベの事実上の支配者である。メンチュエムハトの墓 (第 34 号墓) はテーベ西岸アサシーフ地区にあり、ここから多くの葬送コーンが出土している。このコーンも第 34 号墓に由来するものと考えられる。第 8 次調査ではメンチュエムハトの別の葬送コーン (Davies and Macadam 1957: #418) も出土している (近藤他 2016: 122, 図 6.4)。

④パハカエムサセン (*P3-hq3-m-s3sn*) の葬送コーン

時代：不明

パハカエムサセンの 2 種類の葬送コーンが 1 点ずつ出土した (Davies and Macadam 1957: #267, 324)。それぞれに「門の監督官 (*imy-r rwt*)」と「扇持ち (*by hw*)」の称号が記されている。年代と墓の位置は不明である。

⑤ヘミィ (*Hmy*) の葬送コーン

時代：不明

本遺跡ではヘミィの葬送コーンはこれまでに 10 点出土しており、今回の調査でも 2 点が出土した (Vivó and Costa 1998: #619/A.08)。この葬送コーンは、付近の第 256 号墓からも発見されている (Mostafa 1995: 76)。

⑥ネブアメン (*Nb-imn*) の葬送コーン

寸法：高さ 23.8cm、幅 8.5cm (図 9.2)

時代：不明

ネブアメンの葬送コーンが 1 点出土した (Davies and Macadam 1957: #553)。ネブアメンは「王の書記、法廷の長、供物台の書記、2 つの穀倉庫の監督官 (*sš-nswt, imy-r rwt, sš wdhw imy-r šnwt*)」の称号を持つ人物である。年代と墓の位置は不明である。これまで第 3 次調査、第 8 次調査でも出土している (近藤他 2011: 55; 2016: 124, 図 6.10)。

⑦ウレシュウ (*Wršw*) とヘヌウト (*Hnwt*) の葬送コーン

寸法：高さ 6.0cm、幅 7.8cm (図 9.3)

高さ 8.6cm、幅 8.4cm (図 9.4)

時代：新王国時代

ウレシュウとその妻であるヘヌウトの葬送コーンが 2 点出土した (Davies and Macadam 1957: #308, 340)。それぞれウレシュウとヘヌウトのスタンプが左右反対に押されている。墓の位置は不明である。

⑧ナクトミン (*Nht-mnw*) の葬送コーン

時代：新王国時代トトメス 3 世

ナクトミンの葬送コーンが 1 点出土した (Davies and Macadam 1957: #87)。ナクトミンの墓はシェイク・アブド・アル＝クルナに位置する第 87 号墓である (Porter and Moss 1960: 226)。ナクトミンの葬送コーン

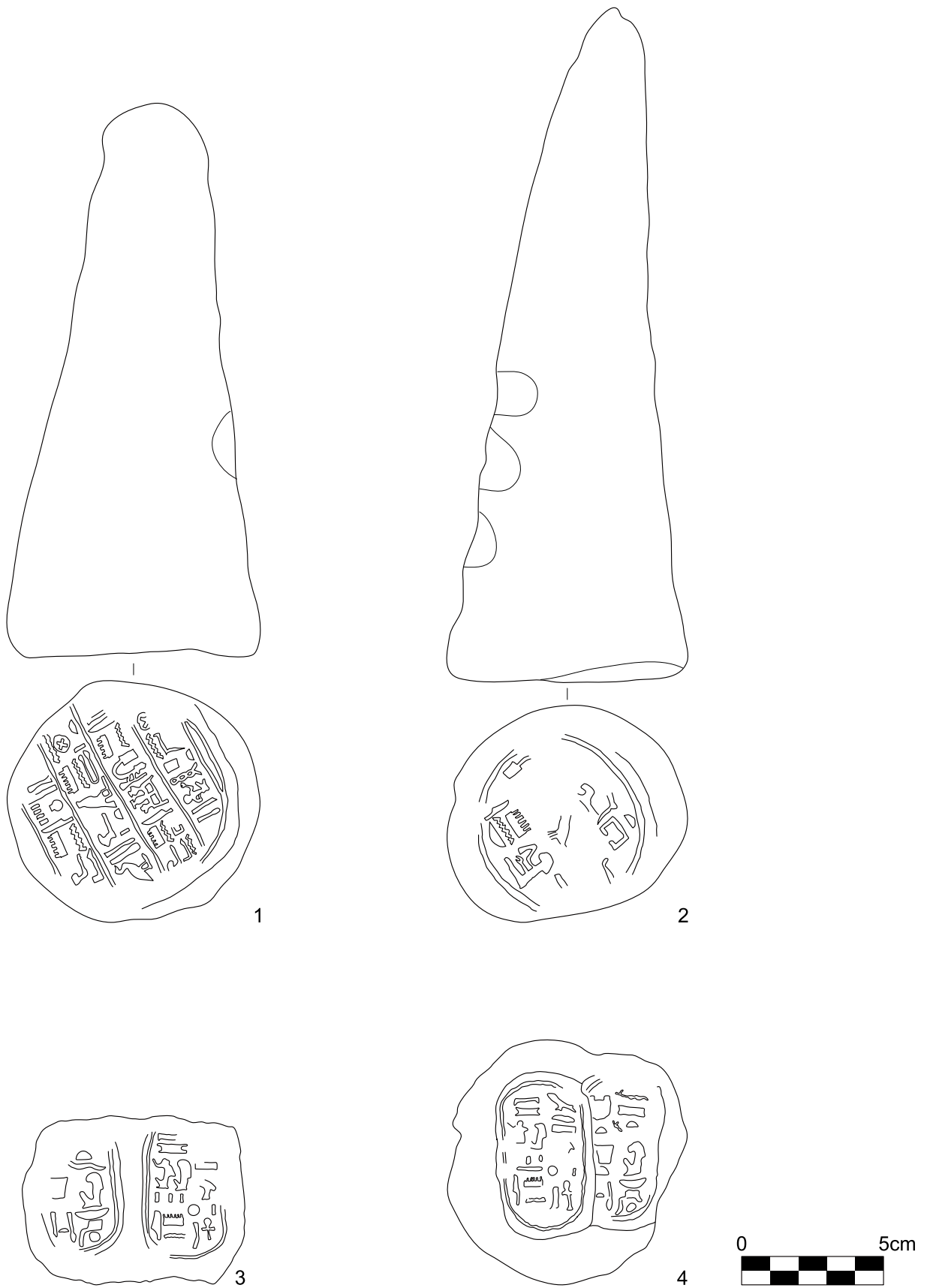


図9 主要出土遺物 (3)
Fig.9 Major finds (3)

はこの他に2種類あり (Davies and Macadam 1957: #91, 113)、本遺跡では第3次調査と第4次調査で出土している (近藤他 2011: 55; 2012: 10, 図 4.14)。

⑨ミン (メヌウ) (*Mnw*) の葬送コーン

時代: 新王国時代トトメス3世

ミンのコーンが1点出土した (Davies and Macadam 1957: #109)。ミンは「ティニスの市長、オヌリス神官長、書記 (*h3ty-ꜥ n Tni, imy-r ḥmw-ntr n Tnhrt, sš*)」の称号を持ち、トトメス3世の治世に年代付けられる。ミンの墓はテーベ西岸シェイク・アブド・アル＝クルナの第109号墓である (Porter and Moss 1960: 226)。

(5) 木棺片

寸法: 高さ 18.1cm、幅 50.4cm (図 10.1)

時代: 末期王朝時代～プトレマイオス朝時代

彩色された木棺片が出土した。保存状態が悪く、一部に銘文や図像が残るのみである。おそらく末期王朝時代～プトレマイオス朝時代に年代づけられると考えられる。

(6) 木製彫像

寸法: 高さ 7.1cm、幅 5.1cm、厚さ 16.6cm (図 10.2)

高さ 19.7cm、幅 6.4cm、厚さ 1.1cm (図 10.3)

時代: 第26王朝

ハヤブサの木製彫像は (図 10.2)、プタハ・ソカル・オシリス神像が立つ台座に施された小箱の上に出土している。こうしたハヤブサの木製彫像は、爪を前方に伸ばして座ったミイラの姿で表現され、彩色が施されるのが特徴的である (Württemberg 2007: 264, 287-288, Fig.3; Mostafa 1995: 78, Taf.XIX, XL)。出土したものは彩色が失われている。第8次調査でも同じくプタハ・ソカル・オシリス神像に付随するハヤブサの木製彫像が出土している (近藤他 2016: 124, 図 7.1)。

同じくプタハ・ソカル・オシリス神像の頭部に冠したと考えられる二枚羽も出土した (図 10.3)。下部にほぞがあり、プタハ・ソカル・オシリス神像の頭部のほぞ穴に装着できるようになっている。これらの特徴は第26王朝のもと考えられている (Raven 1978-1979: 265-266)。第7次調査、第8次調査では、木製のプタハ・ソカル・オシリス神像、二枚羽が出土している (近藤他 2015: 31, 写真 5; 2016: 124, 126, 図 7.2, 写真 4)。

(7) カルトナーージュ片

寸法: 高さ 12.5cm、幅 13.0cm (図 10.4)

高さ 9.2cm、幅 14.5cm (図 10.5)

時代: 末期王朝時代～プトレマイオス朝時代

カルトナーージュ棺の破片が出土した。末期王朝時代～プトレマイオス朝時代に年代づけられ、ヌウト女神 (図 10.4) や神もしくは女神の羽の部分 (図 10.5) が描かれている。

(8) ファイアンス製容器

寸法: 高さ 11.4cm、最大径 8.9cm (図 10.6)

時代: 不明

胴部が膨らんだ卵形のファイアンス製容器が出土した。類例は今のところなく、年代などは不明である。

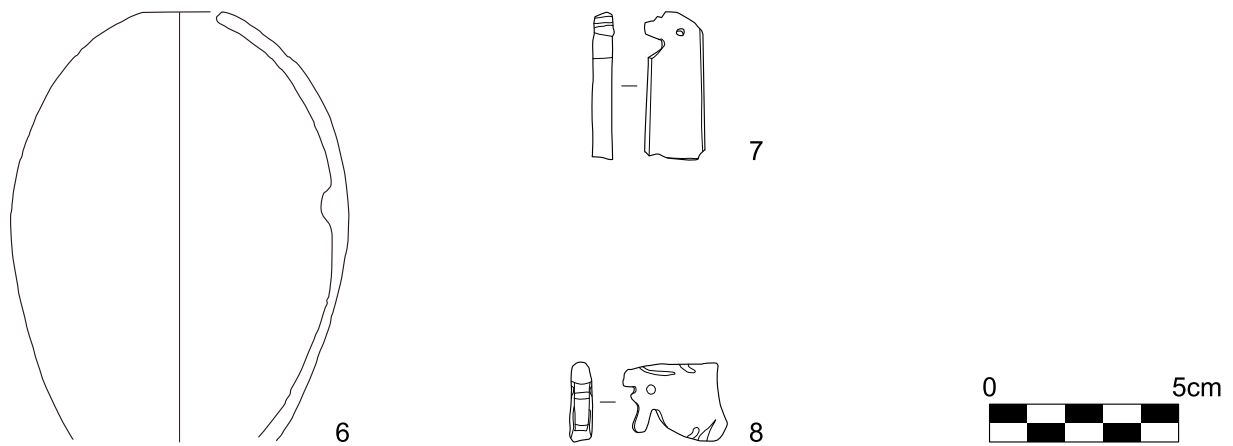
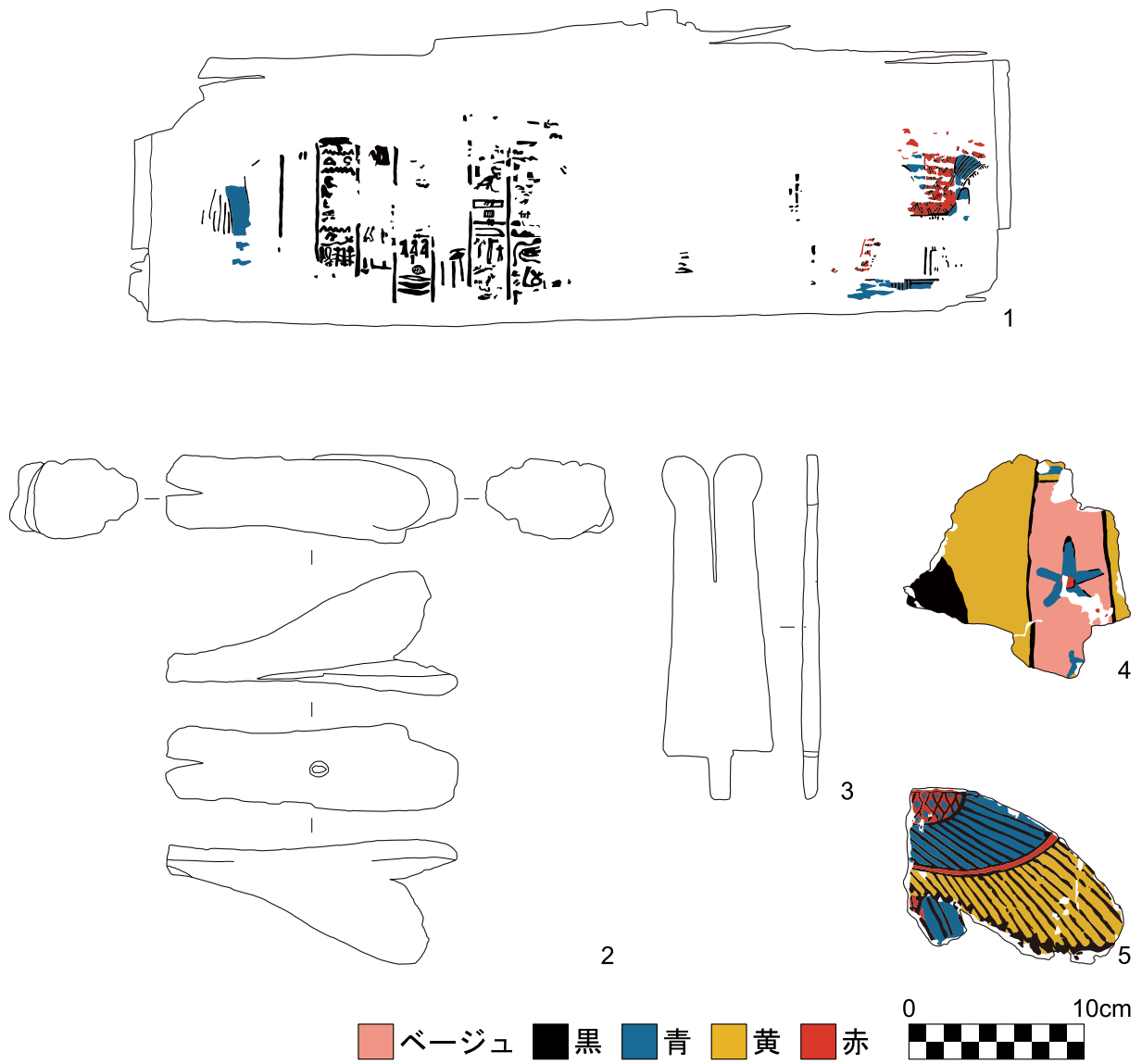


図10 主要出土遺物 (4)
Fig.10 Major finds (4)

(9) アミュレット

寸法：高さ 3.9cm、幅 1.6cm、厚さ 0.6cm (図 10.7)

高さ 2.1cm、幅 2.8cm、厚さ 0.6cm (図 10.8)

時代：第3 中間期から末期王朝時代

図 10.7 のアミュレットには穿孔された穴があり、平たい形状であることからビーズネットに取り付けられていたものと考えられる (D'Auria et al. 1988: 190, Photo.135)。ホルスの 4 人の息子のハピを表現したものと考えられる。こうした特徴は第 25 王朝に年代づけられる。類例は、同じくアル＝コーカ地区に位置する第 32 号墓からも出土している (Schreiber 2008: 70-71, 79, Pls.LXIV.2.2.2.3.9, LXXV.2.3.12)。

また、ファイアンス製のウジャトの眼も出土した (図 10.8)。類例は第 3 中間期から末期王朝時代にかけて出土している (Müller-Winckler 1986: 143, 169; Schreiber 2008: 70-71, Pl.LXV.2.2.2.3.14, 15)。

(10) 土器⁷⁾

今期調査では、主に第 47 号墓前庭部からプトレマイオス朝時代の土器が出土した。特徴的な土器としては、ミニチュア土器 (図 11.1)、碗形土器 (図 11.2, 4, 5)、皿形土器 (図 11.3)、把手付壺形土器 (図 11.6)、アンフォラ (図 11.7) などが挙げられる。

類例は、ルクソール西岸、アサシーフ地区の第 414 号墓 (Budka 2010a: Abb.193.K17.6, 241.Reg369, 244, 294.Reg409, 270.Reg207, 270.Reg.207a)、第 37 号墓 (Laemmel 2013: Figs.17, 43, 44.)、アル＝コーカ地区の第 -61- 号墓 (Schreiber 2014: Fig.2.e.)、カルナク (Marchand 2007: 369-370, Fig.1)、エレファンティネ (Masson 2011: Fig.114) などであり、多くの土器がプトレマイオス朝時代に年代付けることができた。

土器の組成 (Laemmel 2013: 227-236) や黒色の内容物などから考えると、これらの土器はプトレマイオス朝時代に第 47 号墓周辺の墓において埋葬関連の儀式に使用されたと考えられる。また、把手付壺形土器 (図 11.6) などには、孔が空けられており、これらは儀礼後の「土器の破壊 (いわゆる “killing pottery”）」にあたると考えられる (cf. Seiler 2005: 178; Budka 2010a: 408; 2010b: 54-55)。

4. まとめ

2015 年度の第 9 次調査では、第 47 号墓前庭部の完掘を目標として発掘調査を実施した。前庭部北側では、日乾レンガの壁体から、新たに 1 つのウセルハトの葬送コーンが発見された。また、この壁体が前庭部の岩盤の床面直上に設置されていることも明らかになった。更に、日乾レンガ壁体の南側からは、岩盤に穿たれた「ミイラピット」の上面を発見した。このピットは次回の調査で発掘を実施する予定である。また、昨年度発見された日乾レンガのスロープについても、スロープの中込めから、末期王朝時代のシャブティが出土したことから、後世の構造物の可能性が指摘された。更に、第 47 号墓入口の全体も明らかとなった。また、KHT02 (コンスウエムヘブ墓) では、次回以降の保存修復計画立案のための専門家による事前調査が実施され、有益なデータを得ることができた。

以上、第 9 次調査の成果の概要を述べた。来期以降も発掘調査、出土遺構・遺物、保存修復作業を継続し、第 47 号墓並びに KHT01、KHT02 (コンスウエムヘブ墓) を中心としてその周辺の墓について研究を進めていきたい。

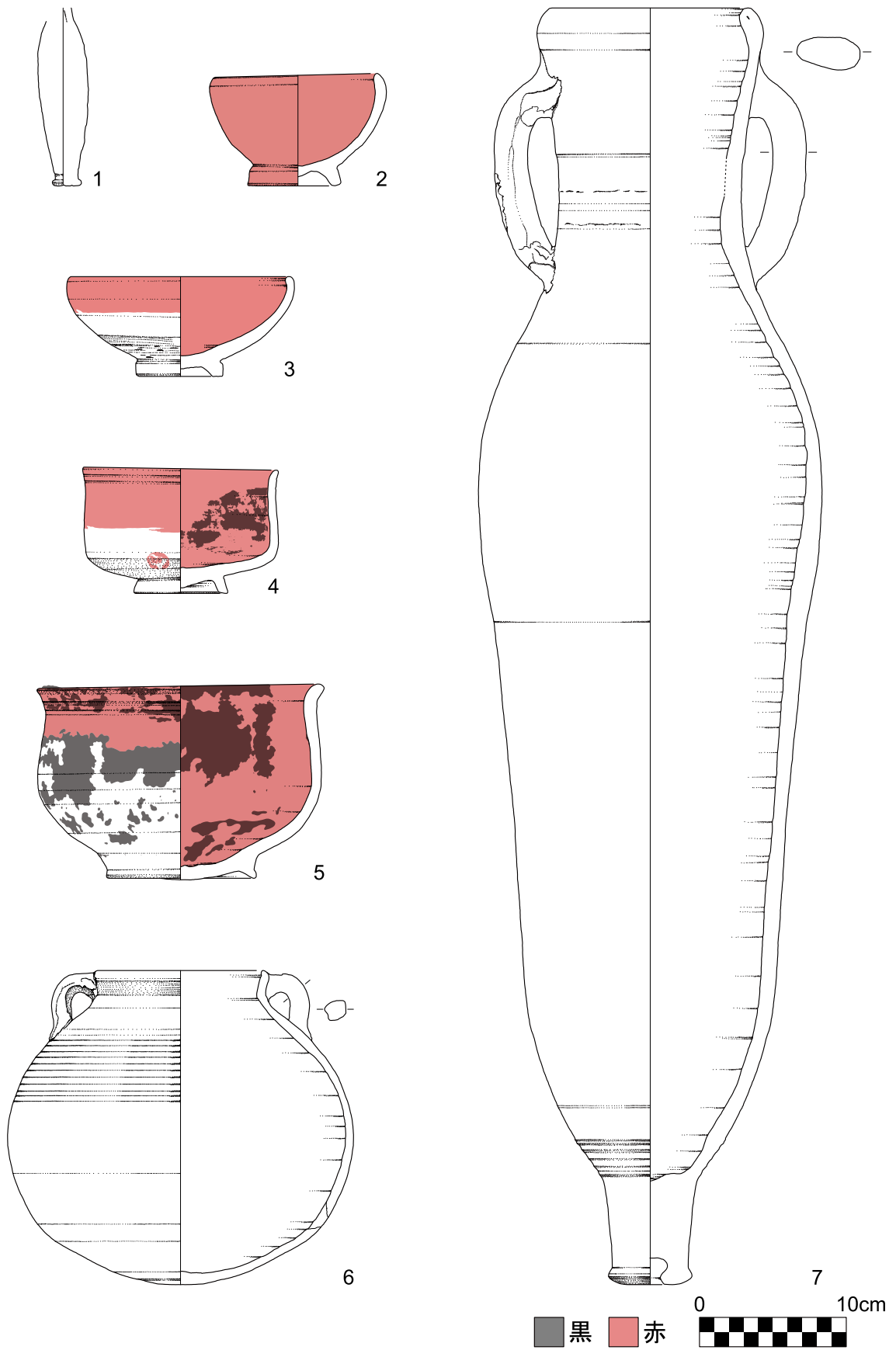


図11 ウセルハト墓前庭部出土土器
Fig.11 The pottery from the forecourt of tomb of Userhat

謝辞

エジプト現地調査では、エジプト・アラブ共和国考古大臣マンドーハ・アル＝ダマティ閣下、考古最高評議会事務総長ムスタファ・アミン博士、古代エジプト部部长マムード・アル＝アフィフィ博士、外国調査隊管轄事務局長葉ハニー・アボウ・アル＝アズム氏、上エジプト総局長スルタン・アイード氏、ルクソール考古局長ムスタファ・ワジーリー博士、ルクソール西岸クルナ査察局長タラート・アブデル・アジーズ博士、ルクソール西岸中部地区長エズ・アル＝ディン・カマル・ヌビ氏、ルクソール西岸中部地区主任査察官マムード・ムーサ氏、査察官ラマダン・ガマル・アハメド氏、外国調査隊管轄クルナ事務局アーデル・エルファン氏をはじめとする方々に多大なご協力を頂いた（肩書きは調査当時のもの）。

また、図版などの作成には早稲田大学エジプト学研究所の石崎野々花、小長谷芽依の協力を得た。ここに記して感謝の意を表す。

なお、本調査は日本学術振興会科学研究費・基盤研究(A)「エジプト、ルクソール西岸の新王国時代岩窟墓の形成と発展に関する調査研究」(研究代表者：近藤二郎)の助成を受けて実施された。

註

- 1) マルカタ南遺跡のコム・アル＝サマク(魚の丘)における調査に関しては主に以下を参照(古代エジプト調査委員会編1983)。
- 2) マルカタ王宮の調査は主に以下を参照(早稲田大学古代エジプト建築調査隊編1993)。ルクソール西岸岩窟墓の一連の調査は主に以下を参照(早稲田大学エジプト学研究所編2002, 2003, 2007)。王家の谷・アメンヘテプ3世王墓における調査は主に以下を参照(Kondo 1992, 1995; Yoshimura and Kondo 1995; Yoshimura and Kondo (eds.) 2004; Yoshimura et al. 2005; 吉村1993; 吉村、近藤1994, 2000; 河合他2001; 吉村他2005, 2013a, 2013b; 高橋他2009, 2013; アメンヘテプIII世王墓報告書刊行委員会編2008, 2011)。
- 3) 第47号墓の研究史、研究上の問題点、アメンヘテプ3世時代の大型岩窟墓の問題について詳しくは以下を参照(近藤1994)。その他、アメンヘテプ3世時代の大型岩窟墓についてはD. アイクナー(Eigner)の論考を参照(Eigner 1983)。
- 4) これまでの報告としては、ラインドによるウセルハトの葬送コーンの報告(Rhind 1862: 137)、ハワード・カーターによる第47号墓の構造に関する記述やウセルハトの葬送コーン、王妃ティイのレリーフ写真などの報告(Carter 1903: 177-178, Pl.II)、A.E.P. ウェイゴール(Weigall)の記述(Weigall 1908: 125)などが挙げられる。また、ベルギーのブリュッセル王立美術史博物館には第47号墓由来の王妃ティイのレリーフが収蔵されている(van de Walle et al. 1980: 18-20, Figs.3, 4)。
- 5) 第9次調査で行われた保存修復作業については前川2017、化学分析については阿部他2017、人類学的調査については、坂上、馬場2017を参照。
- 6) 調査は2015年12月14日から2016年1月21日まで実施された。調査の参加者は以下の通りである。考古班: 吉村作治、近藤二郎、菊地敬夫、河合 望、高橋寿光、福田莉紗、石崎野々花、小長谷芽依、建築班: 柏木裕之、保存修復班: 前川佳文、人類班: 馬場悠男、坂上和弘、分析班: 中井 泉、阿部善也、扇谷依李、日高遙香、渉外: 吉村龍人、ムハンマド・アシュリー。
- 7) 土器の胎土に関しては10倍のルーペによる観察を行い、エジプトの胎土分類システムのウィーン・システムを参照し、記述を行った(Nordström and Bourriau 1993; Bourriau et al. 2000: 130-132)。胎土の色調に関しては、マンセルのカラーチャートを用いて記述を行った。土器の器形分類に関しては、最大径と高さの関係などの数値に基づいた器形分類を参考に、エジプトの土器研究で一般的に用いられている英語名称を日本語に訳し、名称を付した(Aston 1998: 41-51)。

参考文献

Aston, D.A.

1998 *Die Keramik des Grabungsplatzes Q I. Teil I. Corpus of Fabrics, Wares and Shapes*, Mainz am Rhein.

Bourriau, J., Nicholson, P.T and Rose, P.

2000 "Pottery", in Nicholson, P.T. and Shaw, I. (eds.), *Ancient Egyptian Materials and Technology*, Cambridge, pp.121-147.

- Budka, J.
 2010a *Bestattungsbrauch und Friedhofsstruktur im Asasif, Eine Untersuchung der spätzeitlichen Befunde anhand der Ergebnisse der österreichischen Ausgrabungen in den Jahren 1969-1977, Denkschriften der Gesamtakademie, Band 59, Wien.*
 2010b “The Use of Pottery in Funerary Contexts During the Libyan and Late Period: A View from Thebes and Abydos”, in Bares, L., Coppens, F. and Smoláriková, K. (eds.), *Egypt in Transition: Social and Religious Development of Egypt in the First Millennium BCE*, Prague, pp.22-72.
- Carter, H.
 1903 “Report of work done in upper Egypt (1902-1903)”, *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte* 4, pp.171-180.
- D'Auria, S., Lacovara, P. and Roehring, C.H.
 1988 *Mummies & Magic, The Funerary Arts of Ancient Egypt*, Boston.
- Davies, N. de G. and Macadam, M.F.L.
 1957 *A Corpus of Inscribed Egyptian Funerary Cones*, Oxford.
- Eigner, D.
 1983 “Das Thebanische Grab des Amenhotep, Wesir von Unterägypten: Die Architektur”, *Mitteilungen der Deutschen Archäologischen Instituts Abteilung Kairo* 39, pp.39-50.
- Kondo, J.
 1992 “A Preliminary Report on the Re-clearance of the Tomb of Amenophis III”, in Reeves, C.N. (ed.), *After Tutankhamun: Research and Excavation in the Royal Necropolis at Thebes*, London and New York, pp.41-54.
 1995 “The Re-clearance of Tombs WV 22 and WV A in the Western Valley of the Kings”, in Wilkinson, R.H. (ed.), *Valley of the Sun Kings: New Explorations in the tombs of Pharaohs*, Tucson, pp.25-33.
- Kondo, J. and Kawai, N.
 2017 “Discovered, lost, rediscovered: Userhat and Khonsuemheb”, *Egyptian Archaeology* 50, pp.22-26.
- Laemmel, S.
 2013 “A Pottery Assemblage from the Tomb of Harwa (Western Thebes): Mortuary and Cultic Reuse of a 25th Dynasty Funerary Structure”, in B. Bader and M.F. Ownby, *Functional Aspects of Egyptian Ceramics in their Archaeological Context. Proceedings of a Conference held at the McDonald Institute for Archaeological Research, Cambridge, July 24th - July 25th, 2009*, Leuven, pp.217-247.
- Marchand, S.
 2007 “Amphores de Karnak Cfeetk, secteur du « tombeau d'Osiris » et de Dendara Ifao, prospections et sondages sous la basilique”, *Cahier de la Céramique Égyptienne* 8, pp.369-376.
- Masson, A.
 2011 “Persian and Ptolemaic ceramics from Karnak: change and continuity”, *Cahier de la Céramique Égyptienne* 9, pp. 269-310.
- Mostafa, M.F.
 1995 *Das Grab des Neferhotep und des Meh (TT 257), Theben VIII*, Mainz am Rhein.
- Müller-Winckler, C.
 1986 *Die ägyptischen Objekt-Amulette*, Freiburg Schweiz.
- Nordström, H-Å and Bourriau, J.
 1993 “Ceramic Technology: Clays and Fabrics”, in Arnold, D. and Bourriau, J. (eds.), *An Introduction to Ancient Egyptian Pottery*, Mainz am Rhein, pp.143-190.
- Porter, B. and Moss, R.
 1960 *The Topographical Bibliography of Ancient Egyptian Hieroglyphic Texts, Statues, Reliefs and Paintings, I. Theban Necropolis, Part 1. Private Tombs*, Oxford.
- Raven, M.J.
 1978-1979 “Papyrus-Sheaths and Ptah-Sokar-Osiris Statue”, *Oudheidkundige mededelingen uit het Rijksmuseum van Oudheden te Leiden* 59-60, pp.251-296.
- Rhind, A.H.
 1862 *Thebes: Its Tombs and Their Tenants, Ancient and Present: A Record of Excavations in the Necropolis*, London.
- Seiler, A.
 2005 *Tradition und Wandel. Die Keramik als Spiegel der Kulturentwicklung Thebens in der Zweiten Zwischenzeit*, Mainz am Rhein.

Schreiber, G.

2008 *The Mortuary Monument of Djehutymes II, Finds from the New Kingdom to the Twenty-sixth Dynasty, Studia Aegyptiaca Series Maior II*, Budapest.

2014 “Late Dynastic Pottery from Theban Tomb no.-61-”, *Bulletin de Liaison de la Céramique Égyptienne* 24, pp.95-99.

van de Walle, B., Limme, L. and De Meulenaere, H.

1980 *La collection égyptienne, Les étapes marquantes de son développement*, Bruxelles.

Vivó, J. and Costa, S.

1998 “Funerary cones Unattested in the Corpus of Davies and Macadam (Annex I)”, *Bulletin de la Société d'Égyptologie de Genève* 22, pp.59-72.

Weigall, A.E.P.

1908 “Report on the Tombs of Shékh abd' el Gürneh and el Assasif”, *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte* 9, pp.118-136.

Württemberg, S.L.

2007 *Ägyptische Mumien: Unsterblichkeit im Land der Pharaonen*, Mainz.

Yoshimura, S., Capriotti, G., Kawai, N. and Nishisaka, A.

2005 “A Preliminary Report on the Conservation Project of the Wall Paintings in the Royal Tomb of Amenophis III (KV 22) in the Western Valley of the Kings: 2001-2004 Seasons”, *MEMNONIA* XV, pp.203-212.

Yoshimura, S. and Kondo, J.

1995 “Excavation at the tomb of Amenophis III”, *Egyptian Archaeology* 7, pp.17-18.

Yoshimura, S. and Kondo, J. (eds.)

2004 *Conservation of the Wall Paintings in the Royal Tomb of Amenophis III -First and Second Phases Report-*, Tokyo.

アメンヘテプ III 世王墓報告書刊行委員会編

2008 『エジプト王家の谷・西谷学術調査報告書 [I] アメンヘテプ III 世王墓 (KV22) を中心として』、中央公論美術出版。

2011 『エジプト王家の谷・西谷学術調査報告書 [II] KVA とアメンヘテプ III 世王墓 (KV22) に隣接する地域』、中央公論美術出版。

河合 望、吉村作治、近藤二郎、ジョルジョ・カプリオッティ

2001 「アメンヘテプ III 世王墓保存修復プロジェクト予備調査概報」、『エジプト学研究』第 9 号、早稲田大学エジプト学会、pp.39-45.

古代エジプト調査委員会編

1983 『マルカタ南 [I] -魚の丘<考古編・建築編>-』、早稲田大学出版部。

近藤二郎

1994 「テーベ私人墓第 47 号」、『エジプト学研究』第 2 号、早稲田大学エジプト学会、pp.50-60.

近藤二郎、吉村作治、菊地敬夫、柏木裕之、河合 望、西坂朗子、高橋寿光

2009 「第 1 次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第 15 号、早稲田大学エジプト学会、pp.39-70.

2010 「第 2 次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第 16 号、早稲田大学エジプト学会、pp.47-77.

2011 「第 3 次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第 17 号、早稲田大学エジプト学会、pp.45-63.

2012 「第 4 次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第 18 号、早稲田大学エジプト学会、pp.5-20.

近藤二郎、吉村作治、柏木裕之、河合 望、高橋寿光

2013 「第 5 次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第 19 号、早稲田大学エジプト学会、pp.107-120.

2014 「第 6 次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第 20 号、早稲田大学エジプト学会、pp.43-58.

近藤二郎、吉村作治、河合 望、菊地敬夫、柏木裕之、竹野内恵太、福田莉紗

2015 「第 7 次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第 21 号、早稲田大学エジプト学会、pp.19-44.

- 近藤二郎、吉村作治、菊地敬夫、柏木裕之、河合 望、高橋寿光、竹野内恵太、福田莉紗
 2016 「第8次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第22号、日本エジプト学会、pp.113-148.
- 坂上和弘、馬場悠男
 2017 「アル=コーカ地区 TT47 出土の人骨およびミイラの人類的調査 (第9次調査)」、『エジプト学研究』第23号、日本エジプト学会、pp.99-104.
- 高橋寿光、吉村作治、近藤二郎
 2009 「2006年-2007年度アメンヘテプ3世王墓出土土器調査概報」、『エジプト学研究』第15号、早稲田大学エジプト学会、pp.71-92.
- 高橋寿光、西坂朗子、阿部善也、中村彩奈、中井 泉、吉村作治
 2013 「アメンヘテプ3世王墓壁画に使用された顔料の化学分析」、『エジプト学研究』第19号、早稲田大学エジプト学会、pp.59-96.
- 阿部善也、扇谷依李、日高遥香、中井 泉
 2017 「コンスウエムヘブ墓の壁画に使用された彩色顔料の非破壊化学分析」、『エジプト学研究』第23号、日本エジプト学会、pp.66-86.
- 前川佳文
 2017 「コンスウエムヘブ墓壁画の保存修復に向けた事前調査報告」、『エジプト学研究』第23号、日本エジプト学会、pp.87-98.
- 吉村作治
 1993 「早稲田大学古代エジプト調査隊調査報告 (III)」、『オリエント』第36巻第1号、日本オリエント学会、pp.159-177.
- 吉村作治、近藤二郎
 1994 「アメンヘテプ3世王墓の調査について エジプト・ルクソール西岸、王家の谷西谷調査報告」、『人間科学研究』第7巻第1号、早稲田大学人間科学部、pp.187-199.
 2000 「王家の谷・西谷調査報告 - 1992年8月~2000年1月 -」、『エジプト学研究』第8号、早稲田大学エジプト学会、pp.57-64.
- 吉村作治、近藤二郎、河合 望、西坂朗子、瀬戸邦弘、高橋寿光、中右恵理子
 2005 「アメンヘテプ3世王墓保存修復作業概報: 2001年3月~2004年3月」、『エジプト学研究』第13号、早稲田大学エジプト学会、pp.5-21.
- 吉村作治、西坂朗子、高橋寿光
 2013a 「第3期アメンヘテプ3世王墓壁画保存修復プロジェクト概報」、『エジプト学研究』第19号、早稲田大学エジプト学会、pp.43-58.
- 吉村作治、荻谷浩子、西坂朗子、高橋寿光
 2013b 「アメンヘテプ3世の石棺蓋の保存修復作業概報」、『エジプト学研究』第19号、早稲田大学エジプト学会、pp.97-106.
- 早稲田大学エジプト学研究所編
 2002 『ルクソール西岸岩窟墓〔I〕 - 第241号墓と周辺遺構 -』、早稲田大学エジプト学研究所.
 2003 『ルクソール西岸岩窟墓〔II〕 - 第318号墓と隣接する墓 -』、株式会社アケト.
 2007 『ルクソール西岸岩窟墓〔III〕 - 第333号墓、A.21号墓、A.24号墓、W-4 (Nr.-127-) 号墓 -』、株式会社アケト.
- 早稲田大学古代エジプト建築調査隊編
 1993 『マルカタ王宮の研究 マルカタ王宮址発掘調査 1985-1988』、中央公論美術出版.

エジプト学研究 第23号

2017年3月31日発行

発行所 / 日本エジプト学会

〒169-8050 東京都新宿区戸塚町1-104

早稲田大学エジプト学研究所内

発行人 / 吉村作治

The Journal of Egyptian Studies No.23

Published date: 31 March 2017

Published by The Japan Egyptological Society

1-104, Totsuka-chyo, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan

© The Japan Egyptological Society